

東北森林管理局 森林技術・支援センター たより

〒037-0305

青森県北津軽郡中泊町中里亀山540-8

TEL : 0173-57-2001

FAX : 0173-57-4929

E-mail : t_gijutu@rinya.maff.go.jp



青森県林業研究所との合同現地研修会

平成27年9月28日(月)～29日(火)に青森県林業研究所と当センターと合同で民国における森林林業に関する知識・技術の情報共有等を目的とした現地研修会を開催しました。

今回は民有林の取組みについて意見交換等することとし、初日は青森県林業研究所十和田ほ場において、生産しているスギ・カラマツ、ヒバ等の採種園等を見学しました。ヒバの種子は0℃で1年保存すると、発芽率は採取年の50%程度になり、2年保存すると0%になるなどの情報を知ることができました。また、「採種園の樹木1本からどれくらいの種子が採取できるのか」や「着花促進剤のジベレリンはヒバに毎年投与するのか」といった質問が交わされ、わかりやすい回答をいただきました。種子生産について普段接する機会の少ない当センター職員には大変有意義な機会となりました。

2日目は場所を三沢市やおいらせ町に移して、津波被災したクロマツ林の被害状況および津波被災地に植栽したクロマツコンテナ苗を見学しました。

津波被災したクロマツ林では幹折れ被害、海水による被害および二次的なオオソウムシによる被害など様々な要因による被害が見られました。特に汀線から近いクロマツ林については多くが枯死し、少し離れた箇所においても、低地や窪地などの海水が滞留しやすい箇所については枯死していました。

一方、少し離れた箇所の盛り土や凸地あるいは排水路があるようなところでは枯死があまりみられず、この少しの地形の違いでここまで被害が違うのかと正直驚きました。

凹凸地形で水路は効果があると思われるが、逆流して想定外の被害を及ぼす可能性があることや設置経費が伴うことから、土の造成により凸地形に森林を造成していくことが比較的安価で現実的な手法と考えられます。



採種園での説明の様子



ヒバの球果



クロマツのコンテナ苗

海岸林に植栽された
クロマツのコンテナ苗

クロマツコンテナ苗の植栽は青森県産のものを複数の試験地で様々な条件を変えて、活着率等の試験をしており、現在のところ93%～100%の活着率とのことでしたが、土壌の硬度の状態、獣害等があり、今後の経過を注視していく必要があると感じました。

今後も引き続き合同現地研修会を通じて、民国連携して情報発信できるよう共同研究・発表していきたいと考えています。

森林・林業技術講座開催

当センターでは、森林・林業技術の普及や向上を目的として、これまで取り組んできた森林・林業技術の成果を広く一般の人々が触れる機会として、「森林・林業技術講座」を平成26年度より開講しており、今回、「高齢級スギ人工林の間伐効果と複層林施業」の受講申し込みがありました。

9月4日（金）に将来の山づくりに活かしたいという青森県森林整備事業協同組合員10名を対象にスギ上層木の間伐伐採率50%、40%、20%に応じた下層の植栽木の生長等の説明を実施した後、実際の試験地において具体的に解説をしました。当日はあいにくの雨模様ではありましたが、試験地を見学するには雨はやみ、受講者から「ヒバの生育には光環境が良ければ良いほどいいのか」や「スギだけが食害をうけているのか」などの質問・意見等が出され、活発な意見が交わされました。高齢級人工林を複層林へ誘導する際の下木植栽時に適した光環境（ヒバは伐採率50%で生育が良い）などについての理解が深まりました。

今後も森林技術・支援センターでは開発した森林・林業技術の成果を地域の森林に活かせるように取り組んでいく考えです。



室内での説明の様子



試験地での説明の様子

☆講座の申込みは
随時受付中です☆

詳しくは当センターのホームページを見てね！



屏風山海岸防災林現地研修会

地域住民に屏風山の森林の重要性、歴史的意義について理解を深めていただく一助として、平成27年9月9日に地域住民および関係機関を対象に26名参加のもと研修会を津軽森林管理署金木支署管内の屏風山で開催しました。

午前中の講演では、金木支署より屏風山の歴史、国有林の管理及び動植物等について、青森県林業研究所より東北地方太平洋沖地震津波で被害を受けた三沢周辺海岸防災林の枯れたマツ、枯れなかったマツの塩害のメカニズムについて説明があり、海岸林を襲う津波の映像とともに参加者からは驚きの声があがっていました。その後、当センターより屏風山の現状と松食い虫等病虫害対策などの課題について講演を行いました。午後からは屏風山で現在実行中の根固め工や防潮護岸工などの治山工事現場を視察しました。現地の治山工事は1995年から汀線の後退を防止するために実施されており、普段見ることでできない海岸の治山工事に参加者からは「初めて見た」、「他の箇所でも工事しているのか」といった声が聞かれました。

森林・林業の再生に取り組んでいる国有林の現状を理解していただく一つの機会でありましたが、海岸防災林造成のこれまでの歴史を振り返ると、住民参画から立ち上がっているものが多く、今後「地元の森林である防災林を守る」という住民意識を高めていく取組を継続していきたいと思います。



室内での説明の様子



治山工事現場での説明の様子

森林技術普及の窓

～平成27年度森林総合監理士等育成対策事業～

東北ブロック研修(盛岡市 9/15～9/18)

森林技術普及専門官(盛岡署駐在)

将来の森林総合監理士の候補となる若手技術者の資質向上を図る森林総合監理士育成研修事業の一環として、中央研修に続き東北ブロック研修が9月15日から18日までの4日間の日程で盛岡市において行われました。

ブロック研修では、主に「森づくり構想」と「資源循環利用構想」の課題について演習と現地実習を中心とした内容で、盛岡森林管理署管内の姫神岳国有林(1,000ha)をフィールドとし、目標林型と施業方法の検討や森林整備計画等のシュミレーションを行いました。

受講生として、東北局管内の各県担当者13名、署等担当者7名の計20名が参加し、将来、地域に根ざしたフォレスター活動に必要な基礎的知識・技術を習得するため、連日熱心に受講する姿が見うけられました。特に現地実習を踏まえた路網の整備計画と木材供給ビジョンの検討では活発なグループワークとなり、各班のプレゼンテーションとディスカッションでは森林の保全、資源の有効活用や地域の特色を活かした林業の活性化など目指した発表、意見が時間いっぱいまで交わされました。

また、東北では「トータルコスト低減に向けた路網と作業システムの改善」をテーマとした実践研修を岩手県盛岡市と八幡平市で10月29日～30日に開催予定しておりブロック研修同様、安全で円滑に運営されるよう準備に努めてまいります。



プレゼンテーションの様子



現地実習の様子

増川ヒバ施業実験林 ～現地調査の状況について～

増川ヒバ施業実験林では、松川恭佐氏の施業法を経営的に実証する択伐施業が行われてきました。しかし、中小径木が主体の林分が増えてきたことから、大中小径木がバランスよく配置された林分に誘導するため、間伐等を実施するという施業方針のもと、毎年計画的に全本数調査やその結果に基づき森林施業を実施しています。

この実験林は旧1～10林班の林分状況を把握するために、毎年旧1林班ずつ全本数調査を行っています。今年度の取組は2年前の現地調査の施業方針に基づき、6月に青森森林管理署、青森事務所および当センターの合同で実験林の旧4林班の約7haで全本数調査を実施し、径級別本数及び林分蓄積等の状況についてデータを記録しました。このデータからは前回調査よりもヒバの小径木が中径木に移行しつつある林分であることがわかりました。

一方、平成29年度・30年度に全本数調査および施業予定箇所である実験林の旧1・2林班の約25haについて、6月の調査メンバーに加え東北森林管理局担当課参加のもと、7月・9月に施業を検討するための現地調査および検討会を行い、「抜きぎりを実施したほうがよいのではないか」や「森林作業道の路線は林分に配慮した方がよいのではないか。」などの意見交換を行いました。

この増川ヒバ施業実験林で得られた結果をヒバの復元に活用できるように実験林データをできる限り発信していきたいと考えています。



現地踏査の様子



現地踏査の様子

小学生への森林教室

小学校の社会の授業で農業・農業施設について学ぶことから、中泊町にある十三湖土地改良区では、農業水利施設見学会を地域の小学5年生を対象に平成22年から毎年開催し、9月15日（火）に武田小学校14名、9月17日（木）に中里小学校38名および9月30日（水）に薄市小学校7名を対象に、当センターでは水の源としての森林の役割等を説明しました。

森林の役割の説明では水を蓄えたり、山が崩れるのを防ぐという説明に熱心に話を聞き、ノートにメモをとっていました。また、「日本の森林率は何%でしょうか」と言った質問に対して、「98%」や「80%」など生徒の積極的な回答が相次ぎました。また、「世界一高い木は何mでしょうか」と言った質問に対して、答え「約110m」と発表すると生徒からは驚きの声があがりました。

その後の体験コーナーでは実物の種子の体験後に模型の種子を飛ばしてみ、種子の不思議な飛び方に驚きの歓声があがっていました。この経験が生徒の森林に対する興味をもってもらえるきっかけになればと思います。



森をさんぽ

森林技術専門官

増田 悠介

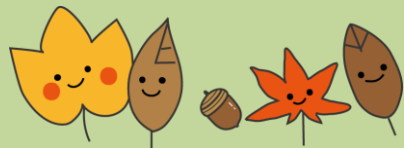
秋も深まり、山野を見渡すとあちらこちらで、木々が秋の衣にかわりはじめています。今の季節に八甲田山、奥入瀬などに行くと紅葉を楽しみに多くの方々がいらしています。

もう10年以上前のことですが、秋に森林を歩いていると、どこからか甘いにおいが漂ってきて、何だろうと不思議に思い、周囲に多く落ちていたハートの形をした葉っぱを手に取りにおいを嗅いでみたところ、びっくり。

ハートの形をした葉っぱから甘いおかしのような匂いが・・・正体はこれだったのか。後日、詳しく調べてみると葉っぱはカツラという種類で、紅葉すると葉っぱから甘いお菓子を精製する際に出るマルトール成分が出ているとのこと。これを知った翌日から秋に山野を歩く際に自慢げに周囲に教えていました（笑）。

紅葉する木にはこのカツラだけではなく、ブナやミズナラ、イタヤカエデなど様々ありますが、数年前に山形県に住んでいた頃に県北の金山町を訪れたのですが、このイタヤカエデの樹液でメープルサップ（メープルシロップに近い）が売られていました。メープルシロップというと、カナダの国旗に描かれているサトウカエデであり、カナダで生産という頭がありましたので、それを知ったときは驚きでした。山形県に行く際は訪れてみてはいかがでしょうか。

紅葉は見るだけではなく、においを嗅いだり、味わったりする五感を使うことでより一層、楽しむことができるのではないのでしょうか。



編集後記

朝晩冷え込むようになり、雨が降る度に寒さが増し、冬の足音が確実に近づいているの感じます。

さて、9月発行予定の『センターたより』でしたが、記事にしたいイベントが重なり少し遅れての発行となっていました。今回掲載できなかった記事もありますが、それはまた次号掲載したいと思います。

今号より始まった森林技術専門官によるコラム、いかがでしたか？「五感を使って紅葉を楽しむ」、私も早速実践してみたいと思います！